

## 第4章

### 農村工業に関する議論の整理

荒神 衣美

はじめに

本稿の目的は、農村工業の形成・発展に関する先行研究の議論を整理することである。発展途上国で展開する農村工業は、多くの農村世帯に兼業・副業として有効な就業機会を提供しているという事例が報告されている（高橋[2000:231-277]、水野[1995]）。また、発展途上国のなかには、農村工業化を経済開発の課題としている国もある。例えば、ベトナムでは農村における非農業就業機会の増加を期待して、今まさに農村工業化に向けた取り組みを進めている。さらに、近年の生計手段の多様化議論の中で、農村工業に直接焦点を当てた議論が少なくなっているが、農村工業は生計手段のひとつとして重要な役割を果たせるはずであり、それに関する議論が軽視されるべきではないと考える<sup>1</sup>。

生計手段の多様化議論<sup>2</sup>では、農村世帯が農業だけに依存せず非農業部門のなかで生計手段を多様化させる背景に、農業所得のみに依存することの次のようなデメリットがあるとする（Ellis [2000:55-76]）。第1に、農業所得には季節性があるため、年間を通じて安定的に所得が得られないこと。第2に、不安定なマクロ経済環境下で所得源を一本化することは、所得源を失うリスクが高いこと。第3に、そのような不十分かつ不安定な農業所得に依存することは、突然の災害や病気などに対する脆弱性を高めてしまうこと。第4に、そもそも農村部の労働市場が農業賃労働を安定的に提供し得ないこと。第5に、金融市場が未発達であるため、農業所得のみでは現金の必要性に答えられないこと。これらのデメリットを克服するため、農村世帯は農業だけ

でなく非農業部門で所得源を多様化させ、消費、就業、投資の平準化とリスク分散を図っているという。

農村工業もこのような役割を担う生計手段の一つと見なせる。本稿では、農村工業がどのようなきっかけで形成され発展するのか、これまでの議論を整理する。まず、農村工業化が農業発展によってもたらされるとする「農村内リンケージ論」を参照する。この議論では農村工業の増加と拡大を促す要因が農村内部で生じるとされる。次に、農村工業の安定的展開を、都市市場とのつながりから説明する「都市リンケージ論」を参照する。ここでは、どのように都市市場とのつながりを形成するかが議論の焦点となる。最後に、農村工業の形成を、農村内外の取引需要だけでなく、農村部で蓄積されている伝統的技術や原材料の活用という視点から説明する「地場産業論」を参照する。

### 第1節 農村内リンケージ論<sup>3</sup>

1950年代から1970年代にかけて、農村経済開発政策の主眼は農業生産性の向上に置かれていた。この時期、農村工業の発展はどのように考えられていたのだろうか。70年代後半に提唱され現在でも農村工業の増加と拡大に関する研究で多く参照される議論に、農村内リンケージ論がある。この議論の中核となっているのは、Mellor [1976]の「農村発展リンケージモデル」(rural growth linkage model)である<sup>4</sup>。

農村発展リンケージモデルは、農業と農村工業の間に発展の乗数効果メカニズム(multiplier effect)が生じるとする仮説である。このモデルでは、農村工業自体の雇用創出効果を認めつつも、基本的には農村工業化は農業発展を補完するもの、もしくはそれに追随するものと捉えている。具体的には、農村工業化は農業発展がもたらす以下の4つのリンケージを通じて実現されるとしている(Mellor [1976:161-191]、Davis et al. [2002:2])。

農業生産の後方連関：農業生産の発展・拡大に伴って農業投入材の需

要が増加するため、これらの生産活動の増加・拡大の可能性が広がる。

農業生産の前方連関：農業生産の拡大は、投入財の需要のみならず農産品加工業など農業生産物を使用した農村工業の増加をもたらす。

消費連関：農業所得の増加によって消費財への需要が増し、家庭用品や家電製品、衣服などの生産・販売活動が増加する。

投資連関：農業所得の増加によって余剰資金が増加し、農業および農村工業への投資が拡大する。

Mellor[1976]は、マーケティングや資金調達などにおける農村工業発展の「制度的」な制約を除去すれば、このような農業発展がもたらす農村内リンケージに応じて、農村工業の増加と拡大が実現されるとする（Mellor[1976:173]）。

以上のように、農村経済開発の主眼が農業生産性の向上に置かれていた時期に提唱された仮設では、さまざまな農村工業の発展が農村内で生じる農業発展との連関の中で説明されている。では、この農村内リンケージは、実際にはどのような状況で効果的に機能するのだろうか。以下、農村工業の増加と拡大における農村内リンケージの影響を検証した2つの実証研究を見てみたい。

Edward and Yunez-Naude [2002]では、メキシコにおいて異なる4州から7村50世帯をサンプルとして、それぞれの農村部で農村内リンケージが農村世帯の農業および非農業所得の向上に貢献しているかどうかを分析している。分析結果は、農村内リンケージは農村工業の拡大に必ずしも結びついていないことを示している。確かに、農業生産の増加は、肥料や農機具などの非農業生産品の投入が増したことによってもたらされている。しかし、この非農業生産品の主な増加は農村工業の発展によるものではなく、近隣の都市市場からの流入増加によるものであった。また、農業所得の増加による消費連関も生じている。しかしながら、その消費需要に応じたのも農村工業製品ではなく、近隣都市市場からの流入品であった。その結果、この事例では農村内で最も増加している非農業活動は農村工業ではなく、農村内リンケージ

によって需要が高まった工業製品を都市市場から購入するための商業であった。Edward and Yunez-Naude [2002:55]は、とくに消費連関に関して「経済が開放的であるほど、農村内リンケージの乗数効果は小さい」と指摘している。

また、Eapan[2001]では、インド・ケララ州の農村部における非農業活動の増加要因として、農業とのつながりと都市部とのつながりのいずれのインパクトが大きいかを実証分析している。ここでは、どちらの影響が強いかは農村部から都市集積地までの物理的距離によることを指摘する。対象事例では都市部とのつながりの影響、具体的には近隣都市市場における消費需要のほうが強くなっている。

これらの実証研究の結果から、農村内リンケージが効果的に機能するか否かは、都市部からの距離に大きく左右されると推測できよう。

## 第2節 都市リンケージ論

では、都市部とのつながりはどのように形成され、どのような農村工業の形成と発展を促すのだろうか。ここでは、都市部の原材料市場や生産品市場とのつながり（本稿ではこれを「都市リンケージ」と呼ぶ。）と農村工業の安定的展開に関する先行研究の議論を参照する。

まず、都市リンケージによって形成される農村工業にはどのようなものがあるのだろうか。先行研究で紹介される事例を見ると、都市部に大規模に展開する工業の一過程が農村に展開するもの（菊池[1996]）や、都市部の企業で生産できない安価な製品を生産するもの（水野[1999]）がある。これらが都市部ではなく農村部で展開する主な意義は、農村部の労働賃金が安いことである。都市リンケージはこれらの農村工業の生産・販売の拡大もしくは安定化を促す要因となる。

では、都市リンケージとは具体的にどのようなものか。先行研究で焦点を当てられる都市リンケージには2側面がある。ひとつは、道路や輸送手段な

どのインフラ整備を通じた物理的なリンケージである。もうひとつは農村工業の生産・流通を仲介する組織や契約などの、制度的なリンケージである。都市リンケージが安定的に形成されるためには、物理的に都市部と農村部がつながるだけは十分でない。伝統的要素の残る農村経済と近代的な都市市場をつなぐ制度が構築される必要がある（菊池[1996]）。

では、どのような制度が農村部と都市部をつなぐ都市リンケージの役割を担っているのだろうか。農村部と都市部をつなぐ制度的な都市リンケージの形態に関しては、東南アジアのケーススタディーを中心に、先行研究が多く存在する。ここでは2つの形成パターンが指摘されている。第1に、都市の経済主体と農村の小規模生産者が直接結びつくパターンである。都市企業の下請生産（菊池[1996]）、農村外の問屋と農村生産者の取引関係（Sato [2000]）が挙げられる。第2に、農村内の比較的富裕層が問屋や商人となって、都市もしくは外国市場への橋渡しを担っているパターンである（高橋[2000]、谷本[1998]、水野[1999]）。

これらの制度的な都市リンケージは、以下のような経済的要因によって存立している。第1に、不安定要因に対応する取引の柔軟性があげられる。先行研究によると、不安定なマクロ経済環境、元手となる所得の変動、製品需要の季節性などに対応するには、企業形態をとって取引を内部化するよりも、元請企業、問屋、商人などのリンケージを用いた方が、柔軟に対応が可能というのである（谷本[1998]、菊池[1996]、水野[1999]）。第2に、リンケージ形成者間の信頼関係による取引費用の削減である。谷本[1998]の日本の織物業、Sato [2000]のインドネシア農村金属加工業の事例研究によると、地縁や長期的取引関係を通じた信頼関係が、品質管理や労務管理にかかるコストを削減しているという。第3に、リンケージ形成の要となる主体が農村・都市間の市場需要に関する情報非対称性を補完する役割を担っていることである。水野[1999]のインドネシア農村織布業では、リンケージの要となる小商人が大規模企業の生産品では充足されていなかった安物への市場需要を察知し、農村工業の販路拡張を担ったことが示されている。

以上のように、都市とのつながりを想定した場合、農村部に展開するのは、安い労働力コストがメリットとなる農村工業である。このような農村工業の安定的展開を支える都市リンケージは、インフラなどの物理的なつながりだけではない。適切な制度の構築によって農村部生産者と都市部の原材料・生産物市場がつながれていることが、農村工業の安定的な生産・流通を支えている。

### 第3節 地場産業論

最後に、これまでの2つの議論とは異なる視点で、農村工業の形成・発展を要素賦存から説明する地場産業論を紹介する。前述の2議論では農村工業の形成と発展のきっかけを農村内外の取引需要から説明していた。一方で、農村工業の形成要因には、取引需要だけでは説明できないものがある<sup>5</sup>。その一つとして、農村部で蓄積されている伝統的技術や原材料の活用によって形成を支えられている地場産業が挙げられる。清成[1967]は地場産業を次のように定義する。

「地場産業とは、主として伝統産業から発展し、労働力および原材料を旧来の地域市場から調達している企業集団をいう。多くは主として労働力の面で当該地域の農業と結びつき、伝統的で労働集約的な生産方法を用い、規模的には小規模零細企業が圧倒的に多い。製品は多くの場合、特産品としての性格を持ち、その市場は地域市場ではなく全国市場（海外市場）である（清成[1967:63]）」

ここで想定される農村工業は、主に農村世帯が伝統的に従事してきた工芸品生産である。もともとは農村世帯の生活上の必要性から、農業の兼業として賦存要素を用いて生産が開始されたものが多い。このような農村工業は、伝統的な生産活動の中で農村部に蓄積されてきた技術や原材料を活用することによって存立している。とくに伝統的技術は農村内部の伝承によって蓄積されており、都市部で代替することが容易ではない。

先行研究は、とくに伝統的技術の活用による農村工業の発展について、以下のような経済的メリットを指摘している。上田[2001]は、北タイの在来織物業が発展した要因として、農村部に比較優位のある要素を生かしている点を指摘する。この事例では、農村に豊富に存在する要素、すなわち農村社会の中で伝統技術を習得した女性を集中的に投入していることが在来織物業の発展要因となっている。ここでは、女性労働力は農閑期の遊休資源であり、機会費用が小さい生産要素であることも指摘される。また、佐竹[1998]は、フィリピンの地場産業の展開を支える労働集約的技術は、農村部に既存の労働力と技術を有効に利用した「適正技術」であると指摘している。

以上のように、農村工業の形成には、農村部に伝統的に蓄積されている技術や原材料などの要素の活用によるものがある。とくに伝統的技術の蓄積は、農村工業が形成された後の発展においても重要な要素となりうるだろう。

おわりに

本稿では、農村部非農業就業機会のひとつである農村工業の展開に関して、これまで先行研究でなされてきた議論を整理した。まず、農村内リンケージ論を参照した。この議論は農村工業の発展を農業発展との連関から説明する仮説である。さまざまな農村工業が基本的に農村内で生じる乗数効果によって形成・拡大するとされる。この仮説に対し、近年の実証研究の事例は、農村内リンケージが農村工業の形成を効果的に促すか否かは、都市部からの距離に大きく左右されるだろうことを示している。

次に、都市リンケージの形成が農村工業の安定的展開を促すとする議論を参照した。ここでは、具体的にどのような制度が都市部と農村部との間で持続的に都市リンケージの役割を担っているかが議論された。先行研究の事例では、持続的に形成される都市リンケージの特質として、不安定要因に対応できる取引の柔軟性、信頼関係に基づく取引費用削減、リンケージの主導的形成者による情報非対称性の補完が指摘されていた。

さらに、上記の2つの議論とは異なる視点から、農村部における要素蓄積が農村工業の形成を促すとする地場産業論を参照した。農村工業の形成・発展要因には、農村内外の市場取引需要だけでは説明できないものがある。地場産業論は農村内に蓄積された伝統的技術や原材料の活用によって農村工業が形成・発展すると指摘する。先行研究では、とくに伝統的技術蓄積の活用の経済的メリットとして、比較優位のある資源の有効活用、適正技術の採用、といった点が指摘された。

以上の先行研究の議論を踏まえ、今後、農村工業の発展を経済開発の課題とする国・地域において、何がその条件となりうるのか、研究を進めていく。とくに、これから農村工業化を進める国・地域においてはグローバリゼーションの影響を無視することができないと考える。グローバリゼーションは、とくに都市リネージュの形成において、対象とする市場の拡大、競争の激化、取引制度の近代化などの変化をもたらすことを予想する。これらが農村工業の発展にどのように影響するか、今後の研究課題としたい。

---

<sup>1</sup> 生計手段の多様化議論の背景には、農村工業化の議論に対する批判がある。農村工業化論は、農村世帯が農業の代替として専業に従事する就業機会の増加のみを想定して農村工業化の進展を議論している。その結果、農村世帯が多就業形態をとって様々な非農業活動に就業すること、またその中で工業以外の非農業活動が経済的意義を持つことを見落としているという見解である (Fisher and Mahajan [1997:8]、Ellis [2000:4])。

<sup>2</sup> 生計手段の多様化の議論では、世帯が生計手段を多様化ができるかどうかは、産業構造の変化ではなく各々の資本保有状況によるとする。世帯の資本保有と生計手段の多様化についてのまとまった見解として、農村生計戦略アプローチ(Sustainable Rural Livelihoods Strategies)がある。農村生計戦略アプローチは、農村世帯の生計手段を農業、非農業、出稼ぎとする。その中でどのような生計手段が取られるかを、農村世帯がいかなる組織・制度を通じていかなる資本(自然、物的、金融、人的、社会)へのアクセスを実現しているか、という点から分析するフレームワークである (Scoones[1998]、Ellis[2000])。



---

<sup>3</sup> ここで言う「農村内リンケージ」は、先行研究では「農業・非農業リンケージ」(farm/non-farm linkage)と呼ばれるものである。本稿では、次節で紹介する都市リンケージとの対比を明確に示すため、「農村内リンケージ」という呼び方を用いる。

<sup>4</sup> Mellor[1976]は当時のインドの停滞する経済状況を分析し、このモデル(仮説)を提唱した。

<sup>5</sup> ただし、地場産業が発展していく段階では、前述のリンケージが影響することも考えうる。例えば、大野[1998]のラオス農村部伝統手織物業では、都市リンケージの形成が手織物業の発展を支えていることを示している。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- 上田曜子[2001]「北タイにおける在来織物業の発展とその生産形態について」  
『経済論叢』167(3)、pp.89-107。
- 大野昭彦 [1998]「農村工業製品をめぐる市場形成 - ラオスにおける手織物業  
- 」『アジア経済』34(4)、pp.2-20。
- 菊池真夫 [1996]「フィリピン首都圏近郊における農村工業の生成 - ラグナ州  
の輸出向け衣料下請業の事例 - 」『アジア経済』37(5)、pp.27-65。
- 清成忠男 [1967]『現代日本の小零細企業 - 発展と倒産のメカニズム - 』文雅  
堂銀行研究社。
- 佐竹真明 [1998]『フィリピンの地場産業ともう一つの発展論』明石書店。
- 社団法人国際食糧農業協会 (FAO 協会) [1998]『開発途上国の農村におけ  
る非農業所得 - 世界食料農業白書 1998 年第 部 - 』。
- 高橋昭雄 [2000]『現代ミャンマーの農村経済：移行経済下の農民と非農民』  
東京大学出版会。
- 谷本雅之 [1998]『日本における在来的経済発展と織物業』名古屋大学出版会。
- 水野広祐 [1995]「インドネシア農村における多就業構造と農村雑業層 - 西ジ  
ャワ・プリアンガン高地における農村工業村の事例 - 」(水野広祐編『東  
南アジア農村の就業構造』アジア経済研究所) pp.111-162。
- 水野広祐 [1999]『インドネシアの地場産業 - アジア経済再生の道とは何  
か?』京都大学学術出版会。

<外国語文献>

- Davis, Benjamin, Thomas Reardon, Kostas Stamoulis and Paul Winters  
(eds.) [2002] *Promoting farm/non-farm linkages for rural  
development. Case studies from Africa and Latin America.* Food and

- Agricultural Organization of the United Nations (FAO).
- Eapan, Mridul [2001] "Rural Non-Farm Employment: Agricultural versus Urban Linkages- Some Evidence from Kerala State, India," *The Journal of Peasant Studies*. Vol.28, No.3, pp.67-89.
- Ellis, Frank [1998] "Household Strategies and Rural Livelihood Diversification," *The Journal of Development Studies*. Vol.35, No.1, pp.1-38.
- Ellis, Frank [2000] *Rural Livelihoods and Diversity in Developing Countries*. Oxford University Press.
- Fisher, Thomas and Vijay Mahajan with Ashok Singha [1997] *The Forgotten Sector: Non-farm employment and enterprises in rural India*. Intermediate Technology Publication.
- Hayami, Yujiro (ed.) [1998] *Toward the Rural-Based Development of Commerce and Industry. Selected Experiences from East Asia*. The World Bank.
- J. Edward, T. and Yunez-Naude, A. [2002] "Farm/non-farm linkages and agricultural supply response in Mexico: a village-wide modeling perspective," in Davis, et al (eds) *Promoting farm/non-farm linkages for rural development. Case studies from Africa and Latin America*. Food and Agricultural Organization of the United Nations (FAO): Rome.
- Mellor, John W. [1976] *The New Economics of Growth. A Strategy for India and the Developing World*. Cornell University Press.
- Sato, Yuri [2000] "Linkage Formation by Small Firms: The Case of a Rural Cluster in Indonesia," *Bulletin of Indonesian Economic Studies*, 36(1), pp. 137-166.
- Scoones, Ian [1998] *Sustainable Rural Livelihoods: A Framework for Analysis*. IDS Working Paper 72.

